

東シムブー諸語の所有者人稱接尾辭について*

Possessive suffixes in the East Simbu languages

千田俊太郎

TIDA Syuntarô

1 はじめに

東シムブー諸語はパプア・ニューギニアのシムブー州北部の廣範圍にわたつて話されてゐる系統的に非常に近い言語群であり、シムブー語族の二大語派の一つをなす。言語・方言の区分もまだ確定できないところが多いが、本稿では千田(2011)で「グループ」と考へたクマン、ゴリン、スワウェなどの單位を言語とし、その變種を方言として扱ふ。

東シムブー諸語の形態法はあまり複雑ではない。名詞につくある程度生産的な接尾辭としては唯一のものが、所有者の人稱・數を表はす接尾辭(所有者人稱接尾辭)である。この接尾辭群が義務的につく一群の名詞がある。親族や身體部位を主に表はす名詞の下位類(分離不可能名詞)である。分離不可能名詞にとつては所有者の人稱・數が屈折範疇をなすわけである。頻度は落ちるが一般名詞(分離不可能名詞ではない名詞)にも、所有者人稱接尾辭は任意につく。

東シムブー諸語の一つであるドム語の場合、一般名詞につく所有者人稱接尾辭は常に同じ形式を取る。次の例の通り、1人稱單數、2人稱單數、3人稱單數、人稱による區別のない非單數^{*1}の四つが區別される(千田2002)。

(1) a. Nbola 「豚」(所有者標示なし)

豚

* 本論文は科学研究費補助金(研究課題番號: 25284078(代表者 千田俊太郎)、20720107(代表者 千田俊太郎)、及び、20320065(代表者 大西正幸))の研究成果である。本研究のための調査においては多くの方々にご協力をいただいた。記して謝意を表す。それぞれのお名前と背景は言語・方言別に註を設けた。

^{*1} ドム語の動詞は、主語の人稱・數により屈折する。主語の數は、主語が人間のとき單數、雙數、複數(3人以上)の數範疇が義務的に區別される。動詞に見られる3人以上を表はす「複數」のために複數といふ用語を使ふことにしたい。そのためここに見られる2人以上を表はす數範疇を非單數と呼ぶことにする(Tida 2006: 85)。

- b. \bola-na / \bola-n / \bola-m / \bola-ne
 豚-1SG.POSS 豚-2SG.POSS 豚-3SG.POSS 豚-NSG.POSS
 「私のお前の/彼の・彼女の/我々・お前たち・彼らの豚」

分離不可能名詞につく所有者人稱接尾辭には、次の (2) に示す異形態がある。

- (2) a. 1 人稱單數: -na, -a, -e
 b. 2 人稱單數: -n, ∅
 c. 3 人稱單數: -m, -i, -e, ∅
 d. 非單數: -ne

分離不可能名詞につく所有者人稱接尾辭の異形態の組み合わせは一部音韻的な條件で説明できるが、基本的には語彙的に決まっております。所有者人稱接尾辭の異形態の現はれ方で分離不可能名詞の屈折類を設定することになる (Tida 2006: 103)。6 種類の基本屈折類が存在する。

- (3) a. 「wa-na / 「wa-n / 「wa-m / 「wa-ne
 息子-1SG.POSS 息子-2SG.POSS 息子-3SG.POSS 息子-NSG.POSS
 「息子、兄弟の息子」 -na/-n/-m/-ne 型 (3 人稱-m 型)
- b. \mr-na / \mr-n / \mr-i / \mr-ne
 肝肺-1SG.POSS 肝肺-2SG.POSS 肝肺-3SG.POSS 肝肺-NSG.POSS
 「肝臟、肺」 -na/-n/-i/-ne 型 (3 人稱-i 型)
- c. \oml-na / \oml-n / \oml-e / \oml-ne
 目-1SG.POSS 目-2SG.POSS 目-3SG.POSS 目-NSG.POSS
 「目」 -na/-n/-e/-ne 型 (3 人稱-e 型)
- d. \gla-na / \gla-n / \gla-∅ / \gla-ne
 口-1SG.POSS 口-2SG.POSS 口-3SG.POSS 口-NSG.POSS
 「口」 -na/-n/-∅/-ne 型 (3 人稱-∅ 型)
- e. \al-a / \al-n / \al-e / \al-ne
 兄弟-1SG.POSS 兄弟-2SG.POSS 兄弟-3SG.POSS 兄弟-NSG.POSS
 「兄、弟、父方平行いとこ (男性)」 -a/-n/-e/-ne 型 (1 人稱-a 型)
- f. \di-e / \di-n / \di-m / \di-ne
 同名者-1SG.POSS 同名者-2SG.POSS 同名者-3SG.POSS 同名者-NSG.POSS
 「同名の人、父方のをば、父方のをばの配偶者」 -e/-n/-m/-ne 型 (1 人稱-e 型)

る通時的な起源に関する考察を行なふ。

また、所有者の人稱・数により變化をしない語彙の中にも通時的にはこの接尾辭がついた形式に由來するものが存在する可能性を示す。3人稱單數所有者しか想定し得ない「葉、枝、脂肪、味、覆ひ」のやうな意味を持つ形式、また通常は3人稱單數所有者をもつが表現上他の人稱の所有者がありうる「尾、翼」などの意味を持つ形式である。このやうな形式についても言及することにする。

2 クマン語諸方言

2.1 クマン語エンドウガ方言

クマン語 (Kuman) は、パプア・ニューギニアシンブー州の州都 クンディアワを中心に廣大な地域にひろがる言語であり、多様な方言を抱へてゐる。本稿で扱ふ言語・方言の中では最も先行研究が多い。クマン語キンデコンド系エンドウガ方言 (Endugla) は、これまで「クマン語」として記述されてきた特徴を典型的に有する方言である^{*2}。例へば音素的な軟口蓋側面音/l/を持つてゐる。閉鎖音は前鼻音化有聲閉鎖音 ^hb, ^hd, ^hg/と前鼻音を伴はない無聲閉鎖音 /p, t, k/の2系列が對立する。二つの閉鎖音系列は以下の記述では b, d, g 對 p, t, k と表記する。

クマン語キンデコンド系方言では流音に n が後續すると流音が t に變化する共時規則がある。(5) に例を示す。

- (5) a. \br-na 「私の頭」 → \bt-na [^hb^ht^h.na]
b. \oml-n 「お前の目」 → \omt-n [o.m^ht^hn]

次の規則がたてられる。

- (6) r, l → t / ___ n (クマン語エンドウガ方言の流音閉鎖音化規則)

これまで記述されてきたクマン語諸方言は全てこの共時規則を持つてゐるやうである。例へば Bergmann (1953)、Nilles (1969) などの辭典にみられるデータは流音閉鎖音化が適用された形式をもつてをり、また Bergmann (1966)、Lynch (1983) などの記述、論考にも取り上げられてゐる。以下の例では語幹末音が流音と t とで交替してゐるやうに見えるものがあるが、全て上記の變化が規則的に起こつたものである。

^{*2} 本稿で用ゐるクマン語エンドウガ方言の資料はオングノ・マンブノ (Ongno Mambno) 出身でエンドウガ族 (Endugla) アンデカグ・ク (Andekagl Ku) 氏族のベビ・マリアさんに教へていただいたものである。

クマン語キンデコンド系エンドウガ方言では分離不可能名詞の聲調は全て下降型 (↘) であり、聲調の面では東シンプー諸語の中で最も単純である (千田 2011)。しかし、所有者人稱による屈折の様相は複雑である。所有者人稱接尾辭の異形態を次に示す。

- (7) a. 1 人稱單數: -na, -a, -∅
 b. 2 人稱單數: -n, -nen, -∅
 c. 3 人稱單數: -m, -mo, -∅, -e~-o
 d. 非單數: -no

3 人稱所有者を表はす接尾辭が -e か -o で現はれる分離不可能名詞の屈折類を 3 人稱-e/-o 型と呼ぶことにする。この型には下位類がある。まづ、最も単純なのが n 以外の子音で終はる語幹である。

- (8) a. $\backslash\text{og-na}$ / $\backslash\text{og-n}$ / $\backslash\text{og-o}$ / $\backslash\text{og-no}$
 手-1SG.POSS 手-2SG.POSS 手-3SG.POSS 手-NSG.POSS
 「手」 -na/-n/-o/-no(子音語幹、3 人稱-o)
- b. $\backslash\text{bt-na}$ / $\backslash\text{bt-n}$ / $\backslash\text{br-e}$ / $\backslash\text{bt-no}$
 頭-1SG.POSS 頭-2SG.POSS 頭-3SG.POSS 頭-NSG.POSS
 「頭」 -na/-n/-e/-no(子音語幹、3 人稱-e)

語幹最後の母音が後舌圓脣の o か u である場合に (8a) のやうに 3 人稱所有者接尾辭が -o の形式で現はれる。それ以外の場合は (8b) のやうに 3 人稱所有者接尾辭は -e である。この 3 人稱所有者接尾辭が -e/-o 交替する仕方は以下の下位類でも全て同様である。

次に、同じ 3 人稱-e/-o 型でも n 終はりの語幹の例を示す。

- (9) a. $\backslash\text{mun-na}$ / $\backslash\text{mun-∅}$ / $\backslash\text{mun-o}$ / $\backslash\text{mun-no}$
 姻戚(女)-1SG.POSS 姻戚(女)-2SG.POSS 姻戚(女)-3SG.POSS 姻戚(女)-NSG.POSS
 「同性同世代姻戚(女)」 -na/-n/-o/-no(n 語幹、3 人稱-o)
- b. $\backslash\text{ogan-na}$ / $\backslash\text{ogan-∅}$ / $\backslash\text{ogan-e}$ / $\backslash\text{ogan-no}$
 腰-1SG.POSS 腰-2SG.POSS 腰-3SG.POSS 腰-NSG.POSS
 「腰」 -na/-n/-e/-no(n 語幹、3 人稱-e)

(9a, b) に示した通り、3 人稱-e/-o 型の n 語幹では 2 人稱所有者接尾辭が ∅ になる。ドム語と同じく n が連続する際に n が一つ削除される規則がはたらいてゐるわけである。

次に、3 人稱所有者形でのみ語幹末に i あるいは u が現はれる語幹交替を示す i/u 語幹の

例を示す。

- (10) a. $\backslash\text{nag-na}$ / $\backslash\text{nag-n}$ / $\backslash\text{nagi-e}$ / $\backslash\text{nag-no}$
體-1SG.POSS 體-2SG.POSS 體-3SG.POSS 體-NSG.POSS
「體」 -na/-n/-e/-no(i 語幹)
- b. $\backslash\text{mud-na}$ / $\backslash\text{mud-n}$ / $\backslash\text{mudu-o}$ / $\backslash\text{mud-no}$
肝肺-1SG.POSS 肝肺-2SG.POSS 肝肺-3SG.POSS 肝肺-NSG.POSS
「肝臓、肺」 -na/-n/-o/-no(u 語幹)

上の例は、基底形では語幹末に接近音 y, w を設定して 3 子音連続の中央の接近音を削除する規則が立てられるかもしれない。i 語幹は複数の語彙の所屬が認められる。u 語幹は今のところ $\backslash\text{mud(u)}$ -「肝臓、肺」しか見付かつてみないが、他の 3 人稱-e/-o 型との共通点と、i 語幹との平行的な関係から一つの型と認めるに償する。これらの語形變化の扱ひ方には全く別の方式もありえる。語幹の交替を認めずに 3 人稱所有者を表はす接尾辭に -ie/-uo という異形態をたてるのである。どちらを取るかは、共時的には若干恣意的な解釋をするしかない。

以上の 3 人稱-e/-o 型の六つの下位類は語幹の形式の違ひによつて規則的に決まる下位類といへる。

次に、語幹末の流音 L/r が人稱により交替し、3 人稱に -e/-o が現はれるものを示す。

- (11) a. $\backslash\text{agr-a}$ / $\backslash\text{agt-n}$ / $\backslash\text{agL-e}$ / $\backslash\text{agr-o}$
兄弟-1SG.POSS 兄弟-2SG.POSS 兄弟-3SG.POSS 兄弟-NSG.POSS
「兄、弟」 -a/-n/-e/-o(流音交替、3 人稱-e)
- b. $\backslash\text{yobr-a}$ / $\backslash\text{yobt-n}$ / $\backslash\text{yobL-o}$ / $\backslash\text{yobr-o}$
骨-1SG.POSS 骨-2SG.POSS 骨-3SG.POSS 骨-NSG.POSS
「骨」 -a/-n/-o/-o(流音交替、3 人稱-o)

上の例は 1/2/3/非單數所有者の語幹末音が r/t/L/r と交替し、1 人稱所有者形と非單數所有者形の接尾辭が -a/-o で現はれるのが特徴的である。2 人稱所有者形では語末に tn の連続が起こるが、共時的には L に由來するのか r に由來するのか分からない。2 人稱所有者形と 3 人稱所有者形の接尾辭は他の 3 人稱-e/-o 型と同じである。しかし、語幹と接尾辭の特異な振る舞ひは語彙的に決まつてみると見なければならず、これだけは 3 人稱-e/-o 型とは區別しておく。ドム語の屈折類と對應するので 1 人稱-a 型と呼ぶことにする。

1 人稱-a 型では、語幹末に bL の子音連続をもつものも 3 人稱所有者接尾辭が -o で出る。

- (12) \abr-a / \abt-n / \abl-o / \abr-o
 娘-1SG.POSS 娘-2SG.POSS 娘-3SG.POSS 娘-NSG.POSS
 「娘」 -a/-n/-o/-o(1人稱-a型、3人稱-o)

以上にみたもの以外の屈折の型を示す。

- (13) a. \guma-na / \guma-n / \guma-∅ / \guma-no
 鼻-1SG.POSS 鼻-2SG.POSS 鼻-3SG.POSS 鼻-NSG.POSS
 「鼻」 -na/-n/-∅/-no(3人稱∅型)
- b. \de-na / \de-n / \de-m / \de-no
 尻-1SG.POSS 尻-2SG.POSS 尻-3SG.POSS 尻-NSG.POSS
 「尻、腸」 -na/-n/-m/-no(3人稱-m型)
- c. \imak-na / \imak-n / \imak-mo / \imak-no
 岳父-1SG.POSS 岳父-2SG.POSS 岳父-3SG.POSS 岳父-NSG.POSS
 「妻の父」 -na/-n/-mo/-no(3人稱-mo型)
- d. \awa-na / \awa-nen / \awa-mo / \awa-no
 祖父母-1SG.POSS 祖父母-2SG.POSS 祖父母-3SG.POSS 祖父母-NSG.POSS
 「祖父母」 -na/-nen/-mo/-no(3人稱-mo、2人稱-nen型)

以上の屈折類に所屬する語彙を次にまとめる。

- (14) a. 3人稱-e/-o型
 i/u語幹: \nag(i)-「體、皮」、\sig(i)-「齒」、\kag(i)-「名」、\drab(i)-「舌」、\mr(i)-
 「～に對する愛情」、\kobr(i)-「臍」、\mud(u)-「肝臟、肺」
 子音語幹 \kar-「足」、\br-「頭」、\ker-「同性同世代姻戚(男)」、\og-「手」、\mok-
 「背」、\nog-「首、喉」、\oml-「目」、\dagl-「脇腹」
 n語幹 \din-「胸」、\dan-「腹」、\ogan-「腰」、\bon-「脛」、\mun-「同性同世代
 姻戚(女)」
- b. 1人稱-a型(流音交替語幹) \agl/r-「兄、弟」、\mamb/r-「額」、\yobl/r-「骨」、
 \abl/r-「娘」、\yogl/r-「母方いところ」
- c. 3人稱∅型: \guma-「鼻」、\dra-「口」、\kna-「耳」、\pauna-「顎、頬」、\kiba-「肩」
- d. 3人稱-m型: \de-「尻、腸」、\mo-「男性器」、\ma-「母」、\wa-「息子」、\wau-「妻
 の母」
- e. 3人稱-mo型: \kuya-「陰、靈」、\kob-「姉妹の子供」、\imak-「妻の父」、\kia-「夫

- (18) a. /dan-na / /dan-∅ / /dan-e / /dan-ne
 腹-1.SG.POSS 腹-2.SG.POSS 腹-3.SG.POSS 腹-NSG.POSS
 「腹」 -na/-∅/-e/-ne(3人稱-e/-o型、n語幹)
- b. /bon-na / /bon-∅ / /bon-e / /bon-ne
 脛-1.SG.POSS 脛-2.SG.POSS 脛-3.SG.POSS 脛-NSG.POSS
 「脛」 -na/-∅/-e/-ne(3人稱-e/-o型、n語幹)

エンドウガ方言で3人稱-e/-o型i語幹に所屬する語彙は、クナナ・ク方言では共時的には3人稱で語末に-iをもつ3人稱-i型と言ふべき屈折をする。

- (19) /nag-na / /nag-n / /nag-i / /nag-ne
 體-1.SG.POSS 體-2.SG.POSS 體-3.SG.POSS 體-NSG.POSS
 「體、皮」 -na/-n/-i/-ne(3人稱-i型)

後述するこの型の所屬語彙にも明らかなやうに、この型は歴史的にエンドウガ方言で3人稱所有者形の語幹末でi/uが出没する3人稱-e/-o型の下位類に對應してゐる。エンドウガ方言と同様に語幹末にiが出没するものと考へない理由はいくつかある。まづ、クナナ・ク方言では3人稱所有者形の末尾に-e/-oが出ないので3人稱-e/-o型の一つとみることができない。また語幹末がi終はりで別の屈折をするものが見付かつてゐる。

エンドウガ方言で3人稱-e/-o型u語幹に屬する「肝臟、肺」を表はすクナナ・ク方言の/mudu-は全語形に語幹末のuを保つてをり、3人稱で接尾辭-eが付く。

- (20) /mudu-na / /mudu-n / /mudw-e / /mudu-ne
 肝肺-1.SG.POSS 肝肺-2.SG.POSS 肝肺-3.SG.POSS 肝肺-NSG.POSS
 「肝臟、肺」 -na/-n/-e/-ne(3人稱-e/-o型、母音語幹)

「肝臟、肺」の3人稱形には/mudw-eのほか/mud-eもあり、後者の存在はエンドウガ方言と比べると興味深い。エンドウガ方言では3人稱のみが保つてゐる語幹末のuが、クナナ・ク方言では3人稱のみで失はれるのである。上と同じ語形變化をするものに次のものが見付かった。

- (21) /wi-na / /wi-n / /wi-e / /wi-ne
 夫-1.SG.POSS 夫-2.SG.POSS 夫-3.SG.POSS 夫-NSG.POSS
 「夫」 -na/-n/-e/-ne(3人稱-e/-o型、母音語幹)

以上、「肝臓、肺」と「夫」の二つについては3人稱で-e/-oの交替を起こさないことが原則に反するが、n語幹でも同じことが起こつてゐる。ここでも3人稱-e/-o型の母音語幹の振る舞ひと見ることにする。逆に、-e/-o交替はn語幹や母音語幹以外でしか起こらない。

その他の3人稱-e/-o型は、子音語幹もn語幹もエンドウガ方言と基本的に同じ振る舞ひをする。流音脱落を起こすものがあるが上に示した音韻規則に従ふもので、特別な屈折類とは認める必要がない。

- (22) a. /vog-na / /vog-n / /vog-o / /vog-ne
 手-1.SG.POSS 手-2.SG.POSS 手-3.SG.POSS 手-NSG.POSS
 「手」 -na/-n/-o/-ne(3人稱-e/-o型)
- b. /ka-na / /ka-n / /kaL-e / /ka-ne
 足-1.SG.POSS 足-2.SG.POSS 足-3.SG.POSS 足-NSG.POSS
 「足」 -na/-n/-e/-ne(3人稱-e/-o型、流音脱落)

これまでに見た3人稱-e/-o型、3人稱-i型のほかに次の語形變化型が存在する。

- (23) a. /yobr-a / /yobr-n / /yobL-e / /yobr-e
 骨-1.SG.POSS 骨-2.SG.POSS 骨-3.SG.POSS 骨-NSG.POSS
 「骨」 -a/-n/-e/-e(1人稱-a型、流音交替)
- b. /de-na / /de-n / /de-m / /de-ne
 腸-1.SG.POSS 腸-2.SG.POSS 腸-3.SG.POSS 腸-NSG.POSS
 「尻、腸」 -na/-n/-m/-ne(3人稱-m型)
- c. /komba-na / /komba-n / /komba-me / /komba-ne
 肩-1.SG.POSS 肩-2.SG.POSS 肩-3.SG.POSS 肩-NSG.POSS
 「肩」 -na/-n/-me/-ne(3人稱-me型)

クナナ・ク方言では流音の閉鎖音化規則がないため1人稱-a型の語幹末音は、常に流音で現はれる。

3人稱-me型の中には呼稱の特別形式を持つものがある。

- (24) a. /bawa-na / /bawa-n / /bawa-me / /bawa-ne
 舅父-1.SG.POSS 舅父-2.SG.POSS 舅父-3.SG.POSS 舅父-NSG.POSS
 「母方のをぢ」 -na/-n/-me/-ne(3人稱-me型)
 呼稱: /bawe 「をぢさん!」

- b. \backslash awa-na / \backslash awa-n / \backslash awa-me / \backslash awa-ne
 祖父母-1.SG.POSS 祖父母-2.SG.POSS 祖父母-3.SG.POSS 祖父母-NSG.POSS
 「祖父母」 -na/-n/-me/-ne(3人稱-me型)
 呼稱: \backslash awa 「ぢいさん!、ばあさん!

\backslash awa「祖父母」は接尾辞を伴はない形式で呼稱に使へるむね Hannemann (1969: 44) に記載がある。

以上に見てきた各屈折類の所屬語彙を判明してゐる限りで示しておく。

(25) a. 3人稱-e/-o型

子音語幹 \backslash og-「手」、 \backslash mok-「背」、 \backslash nog-「首、喉」、 \backslash ka(L)-「足」、 \backslash om(L)-「目」
 n語幹 \backslash dan-「腹」、 \backslash bon-「脛」、 \backslash ogan-「腰」
 母音語幹 \backslash mudu-「肝臓、肺」、 \backslash wi-「夫」

- b. 3人稱i型: \backslash mr(i)-「～に對する愛情」、 \backslash nag(i)-「體、皮」、 \backslash sig(i)-「齒」、 \backslash kobr(i)-「臍」、 \backslash bik(i)-「腿」、 \backslash kag(i)-「名」、 \backslash drab(i)-「舌」、 \backslash eb(i)-「妻」、 \backslash imak(i)-「妻の父」、 \backslash kob(i)-「姉妹の子供」、 \backslash mom(i)-「母方のをぢ」
 c. 1人稱-a型(流音交替) \backslash yobl/r-「骨」、 \backslash agl/r-「兄、弟」、 \backslash abl/r-「姉、妹」
 d. 3人稱 \emptyset 型: \backslash guma-「鼻」、 \backslash dra-「口」、 \backslash kna-「耳」、 \backslash peru-「胸」、 \backslash am-「乳房」、 \backslash kuya-「陰」
 e. 3人稱-m型: \backslash de-「尻、腸」、 \backslash mo-「男性器」、 \backslash ma-「母」、 \backslash wa-「息子」
 f. 3人稱-me型: \backslash koba-「肩」、 \backslash bawa-「母方のをぢ」、 \backslash awa-「祖父母」、 \backslash gawa-「孫」

次は不規則なものである。

- (26) a. \backslash mabr-na / \backslash mabr-n / \backslash mabol-e / \backslash mabr-ne
 額-1.SG.POSS 額-2.SG.POSS 額-3.SG.POSS 額-NSG.POSS
 「額」 -na/-n/-e/-ne(3人稱-e/-o型、流音交替、3人稱不規則)
 b. \backslash ni-na / \backslash ne-n / \backslash ne-m / \backslash ne-ne
 父-1SG.POSS 父-2SG.POSS 父-3SG.POSS 父-NSG.POSS
 「父」 -na/-n/-m/-ne(3人稱-m型、1人稱語幹不規則)
 c. \backslash abar-a / \backslash abar-n / \backslash abaul-e / \backslash abar-e
 姉妹-1SG.POSS 姉妹-2SG.POSS 姉妹-3SG.POSS 姉妹-NSG.POSS
 「姉、妹」 -a/-n/-o/-e(1人稱-a型、3人稱語幹不規則)

(29) r → t / ____ .n

(ディカ語の流音閉鎖音化規則)

次の (30a) は流音閉鎖音化規則が適用される例、(30b, c) はこの規則が適用されずに r がそのまま実現する例である。

(30) a. /bt-na 「私の頭」 [ʰbʰtʰna]

b. /br-n 「お前の頭」 [ʰbrʰn]

c. /br-e 「彼の頭」 [ʰbrʰe]

次にニマイ・ディカ語ディカ方言の所有者人稱接尾辭の異形態を示す。

(31) a. 1 人稱單數: -na, -a

b. 2 人稱單數: -n

c. 3 人稱單數: -m, -e, -∅, -i

d. 非單數: -ne, -e

ニマイ・ディカ語では次の例に挙げる五種類の語形變化がそれぞれの屈折類として認められる。

- (32) a. /ga-na / /ga-n / /ga-m / /ga-ne
體-1SG.POSS 體-2SG.POSS 體-3SG.POSS 體-NSG.POSS
「體、皮」 -na/-n/-m/-ne(3 人稱-m 型)
- b. /mr-na / /mr-n / /mr-ii / /mr-ne
肝肺-1SG.POSS 肝肺-2SG.POSS 肝肺-3SG.POSS 肝肺-NSG.POSS
「肝臟、肺」 -na/-n/-i/-ne(3 人稱-i 型)
- c. /ok-na / /ok-n / /ok-e / /ok-ne
手-1SG.POSS 手-2SG.POSS 手-3SG.POSS 手-NSG.POSS
「手」 -na/-n/-e/-ne(3 人稱-e 型)
- d. /guma-na / /guma-n / /guma-∅ / /guma-ne
鼻-1SG.POSS 鼻-2SG.POSS 鼻-3SG.POSS 鼻-NSG.POSS
「鼻」 -na/-n/-∅/-ne(3 人稱 ∅ 型)
- e. /akr-a / /akl-n / /akl-e / /akl-ne
兄弟-1SG.POSS 兄弟-2SG.POSS 兄弟-3SG.POSS 兄弟-NSG.POSS
「兄、弟」 -a/-n/-e/-ne(1 人稱-a 型)

語幹末の流音が交替する 1 人稱-a 型は、クマン語と異なり 1 人稱で r、その他で l をもつ。
 それぞれの屈折類に所屬する語彙を語幹で示す。

- (33) a. 3 人稱-m 型: 「ga- 「體、皮」、ki- 「齒」、ka- 「名」、nde- 「尻、腸」、ap- 「年上
 兄弟姉妹」、kep- 「年下兄弟姉妹」、wa- 「息子」、ker- 「同性同世代姻戚(男)」、
 moi- 「母方のをぢ」、mn- 「同性同世代姻戚(女)」、yau- 「祖父」、vai- 「祖母」、
 gau- 「孫」、dii- 「同名の人」
- b. 3 人稱-i 型: mr-(ii) 「肝臟、肺」、mr-(i) 「～に對する愛情」
- c. 3 人稱-e 型: vok- 「手」、kal- 「足」、br- 「頭」、omi- 「目」、mapl- 「額」、din-
 「胸」、dakl- 「脇腹」、yopl- 「骨」、pek- 「首、喉」、bn- 「腿」、bon- 「脛」
- d. 3 人稱 ∅ 型: nguma- 「鼻」、gra- 「口」、kna- 「耳」、kipa- 「肩」、muu- 「背」、
 kuya- 「陰、靈」
- e. 1 人稱-a 型: vkl- 「兄、弟」、apl- 「娘」

1 人稱で語幹交替を起こすものがある。

- (34) a. Vnanape / Vne-n / Vne-m / Vne-ne
 父.1SG.POSS 父-2SG.POSS 父-3SG.POSS 父-NSG.POSS
 「父」 (3 人稱-m 型-1 人稱語幹交替)
- b. Vnamna / Vma-n / Vma-m / Vma-ne
 母.1SG.POSS 母-2SG.POSS 母-3SG.POSS 母-NSG.POSS
 「母」 (3 人稱-m 型-1 人稱語幹交替)

父母を表はす語の 1 人稱所有者形は、多くの東シンプー諸語で補充法によつてできてゐる。
 ドム語では Vape(父.1SG.POSS) Vmna(母.1SG.POSS) である。ニマイ・ディカ語ではこれに、
 もともと獨立代名詞である「na(私)」を接頭させて語幹に組み込んでゐる。それも「父」には
 これが二度ついたもののやうである。それぞれ所有者を表はす獨立代名詞を先行させるこ
 とができる。

- (35) a. 「na Vnanape 「私の父」
 我 父.1SG.POSS
- b. 「na Vnamna 「私の母」
 我 母.1SG.POSS

母音語幹 3 人稱 \emptyset 型の中には 3 人稱-m 型と揺れるものがある。例へば「陰、靈」を表はす \backslash kuya- は 3 人稱で接尾辭が $\emptyset \sim$ -m と揺れる。

語幹末音が n のものの中には不規則なパターンを示すものがある。

- (36) a. \backslash dan-na / \backslash dan-n ~ \backslash dan-e / \backslash dan-e / \backslash dan-ne ~
 腹-1SG.POSS 腹-2SG.POSS 腹-2SG.POSS 腹-3SG.POSS 腹-NSG.POSS
 \backslash dan-e 「腹」 (2 人稱、非單數で形式の揺れる接尾辭)
 腹-NSG.POSS
- b. \backslash okain-a / \backslash okain-n / \backslash okain-e / \backslash okain-e
 腰-1SG.POSS 腰-2SG.POSS 腰-3SG.POSS 腰-NSG.POSS
 「腰」 (1、非單數に不規則)

次は更に例外的な語形變化をするものである。

- (37) a. \backslash pauna / \backslash paune 「顎、頬」
 顎.1/2/3SG.POSS 顎.NSG.POSS
- b. \backslash apol-na / \backslash apol-n / \backslash apol-le / \backslash apol-ne 「姉、妹」
 姉妹-1SG.POSS 姉妹-2SG.POSS 姉妹-3SG.POSS 姉妹-NSG.POSS

ニマイ・ディカ語の分離不可能名詞や所有者人稱接尾辭はクマン語やドム語のものによく似てゐると言へる。

4 ゴリン語諸方言

4.1 ゴリン語ボルミル方言

ゴリン語 (Golin) ボルミル方言 (Borml)^{*5} はゴリン・ミアン系諸方言 (千田 2011) の一つであり、これまで「ゴリン語」と呼ばれてきた言語の特徴を典型的に示す方言である。例へば閉鎖音は有聲性のみが對立する /p, t, k/ と /b, d, g/ の 2 系列をもち、有聲閉鎖音が前鼻音化特徴をもたない。また聲調は高型 (H)、上昇型 (V)、低型 (L) の三つが對立する。

この方言の分離不可能名詞は 1 人稱所有者とそれ以外 (一般所有者あるいは非 1 人稱所有者) の二つの人稱・數が接尾辭により義務的に標示される。1 人稱所有者の接尾辭は複數の異形態を持つが一般所有者の接尾辭は常に同じ形式で現はれる。

^{*5} 本稿で用ゐるゴリン語 (Golin) ボルミル方言 (Borml) の資料はボルミル出身でゴリン族 (Golin) デル・ク (Del Ku) 氏族のアナ・ゴレさんに教へていただいたものである。

- (38) a. 1 人稱: -nan, -an, -e, -∅
 b. 一般所有者: -n

上に示した 1 人稱所有者接尾辭の現はれ方により、分離不可能名詞を以下の四つの表面的な型に分類することができる。次に接尾辭のついた具體的な形式を示す。

- (39) a. √kob-nan / √kob-n 「姉妹の子供」 -nan / -n (-nan 型)
 甥姪-1.POSS 甥姪-POSS
 b. √kel-an / √kel-n 「同性同世代姻戚 (男)」 -an / -n (-an 型)
 姻戚-1.POSS 姻戚-POSS
 c. √mom-e / √mom-n 「母方のをぢ」 -e / -n (-e 型)
 舅父-1.POSS 舅父-POSS
 d. √duu / √duu-n 「同名の人」 ∅ / -n (∅ 型)
 同名者-1.POSS 同名者-POSS

1 人稱所有者が想定される文脈で一般所有者形が使はれることがときどきある。次に、それぞれの型に屬する語彙の語幹を挙げる。

- (40) a. -nan 型: √loo- 「手」、√kau- 「足」、√gai- 「體、皮」、√mri- 「肝臟、肺」、√sig- 「齒」、√kaa- 「名」、√guma- 「鼻」、√gra- 「口」、√kra- 「耳」、√mab- 「額」、√tawa- 「肩」、√kub- 「腹」、√muu- 「背」、√de- 「尻、腸」、√noo- 「首、喉」、√liba- 「靈」、√ab- 「同性年上兄弟」、√keb- 「同性年下兄弟」、√wa- 「息子」、√kob- 「姉妹の子供」、√gau- 「孫」、√wau- 「妻の母」、√lam- 「乳房」、√di- 「胸」、√b- 「腿」、√bo- 「脛」、√daa- 「脇腹」
 b. -an 型: √gibl- 「頭」、√oml- 「目」、√oon- 「腰」、√al- 「異性兄弟」、√abl- 「娘」、√kel- 「同性同世代姻戚 (男)」、√mn- 「同性同世代姻戚 (女)」、√kiil- 「臍」、√grapl- 「舌」
 c. -e 型: √mom- 「母方のをぢ」、√yau- 「祖父」、√vima- 「妻の父」
 d. ∅ 型: √duu- 「同名の人」、√lai- 「祖母」

-e 型 (40c) と ∅ 型 (40d) に屬するものは、1 人稱で -nan を取ることが許される場合がある。例へば -e 型の √vima- 「妻の父」は 1 人稱の形式が二種類確認される。-e 型と ∅ 型は一部、-nan 型との揺れを示すわけである。このやうな揺れを充分に見つけ出したとは言へない。今後、調査が進めば他にも -e 型、∅ 型語彙の存在が判明する可能性がある。

屈折の型のうち、-nan 型 (40a) と -an 型 (40b) は規則型であり (40c, d) の -e 型と ∅ 型は變格だと言へる。變格かどうかは語彙的に指定されてゐる。規則型は、語幹末音が齒莖共鳴

音以外であれば-nan 型、齒莖共鳴音であれば-an 型と、語幹末音により条件づけられた異形態である。すると、以上に示した表面的な型は、共時的な屈折類としては大きく 1. 正則類 (-nan 型、-an 型) 2. -e 型、3. ∅ 型の 3 類にまとめるのが良いかもしれない。

-nan 型の一般所有者接尾辞は、時に-nn[n^hn] といふ形式で出る。この形式は主に 2 人稱所有者、複数所有者をもつ場合に現れるやうであり、古形の残つたものではないかと考へられる。-nn の出現は語幹の形式からは豫測不可能であり、また全て-n と交替が可能である。-nn の存在のために屈折類の所屬決定が一見難しいものもある。例へば Loo-「手」は非 1 人稱の形式として Loonn がありえ、一見語幹が Loo(-nan 型) と Loon(-an 型) で揺れるやうに見える。上の分類では-n~-nn の揺れが見られる場合の Loonn のやうな形式は、Loo(-nan 型) に-nn がついたものとして提示した。しかし、-n~-nn の揺れは屈折類の揺れである可能性もある。ゴリン語ボルミル方言の分離不可能名詞は必ず所有者人稱の範疇を内在してをり、∅ 型の 1 人稱の形式以外は必ず有形の標識がつく。語幹は n 終はりのものも母音終はりのものもある。そのことが、語幹と接尾辞の境界を見えにくくしてしまつてゐる。次に示す二つの語彙の屈折語形を比べるとそのことがよく分かる。

- (41) a. Loo-nan / Loo-n~Loo-nn (-nan 型)
手-1.POSS 手-POSS
- b. √oon-an / √oon-n (-an 型)
腰-1.POSS 腰-POSS

ボルミル方言では通時的には-an 型 n 語幹から-nan 型母音語幹への移行が多く起こつたと言へる。「di-「胸」、ɸb-「腿」、lbo-「脛」、√daa-「脇腹」のやうな語彙は他の言語・方言で n 終はりの語幹である。

複数の語幹の所屬が認められるもののみ上の屈折の型として提示した。その他の場合、つまり一例づつしかみつからない不規則な屈折をするものは二つあつた。

- (42) a. √mna / √ma-n 「母」
母.1.POSS 母-POSS
- b. 「ail-anan / 「ail-en 「鳩尾」
鳩尾-1.POSS 鳩尾-POSS
- c. √ne-n 「父」(不變化)
父-POSS

次に示す n 終はりの語彙は語形變化が確認できなかつたが、ゴリン語諸方言以外で語末

に鼻音をもつてみない。所有者接尾辭に遡る可能性が高いと考へる^{*6}。

- (43) a. *Vig-n* 「毛」、*Yoblaa-n* 「骨」、*(Voon)* 「*mori-n* 「掌」、*Vml-n* 「指、卵」、*Vguml-n* 「乳首」、*Vpauna-n* 「顎、頬」、*nr-n* 「液」、*Lam-n* 「乳」、*Vyuu-n* 「尾」、*Vgool-n* 「節、關節」、*Vdib-n* 「後ろ脚」、*Vpee-n* 「前脚」、*Vkooi-n* 「翼、鞆の手」、*Ldiun-n* 「(鼠などの)口髭」、*Vnula-n* 「爪」、*Vtoopl-n* 「覆ひ」、*Vyoo-n* 「枝」、*Vari-n* 「葉」、*Vduulaan-n* 「根」、*Vmn-n* 「梢」、*Vob-n* 「種苗」、*Vdoin-n* 「薩摩芋の苗」、*Vplg-n* 「蓋」、*Vula-n* 「(屋根の)垂木」、*bri-n* 「(屋根の)棟木」、*Vkula-n* 「(斧の)柄」、*Vduul-n* 「削りかす」、*Vnuplaa-n* 「粗朶、枯れた小枝」、*Vkilkn-n* 「灰」、*Vgwiin-n* 「バナナの房の段」、*lkn-n* 「バナナの房の莖」
- b. *Vkomm(-n)* 「初め」
- c. *Lpen-n* 「ひらけたところ」、*Vbolai-n* 「上」、*Vtee-n* 「遠い」、*baa-n* 「途中」、*Vdaa-n* 「坂」、*Vbna-n* 「端」、*Vbin-n* 「底」、*Veri-n* 「尾根」、*Vkan-n* 「監獄」、*Vkun-n* 「同じ、類似の」、*Vplaa-n* 「平べつたい」、*gol-n* 「古い」、*muu-n* 「冷めた(食べ物)」*nl* *Vkul-n* (*Vsungwe*) 「瀧(が落ちる)」、*Lsr-n* 「質問」、*Vmo-n* 「説明」、*Vduul-n* 「ついて行くこと」、*Vob-n* 「量ること、分配すること」、*Vgib-n* 「歯ぎしり」、*Vdaal-n* 「臭氣」、*Vdoon-n* 「痒み」、*Vgal-n* (*Ver-*) 「ちくちく」
- d. *Vbiga-n* 「羊齒」、*Vter-n* 「蚤」、*Vpr-n* 「鹽」
- e. *Vyal-n* *ŋi* 「その男」

4.2 ゴリン語北ユリ方言

ゴリン語北ユリ方言はゴリン・ミアン系諸方言と異なる特徴をいくつかもつ^{*7}。分節音レベルでは、閉鎖音において前鼻音化有聲閉鎖音 *mb, nd, ŋg* と前鼻音を伴はない無聲閉鎖音 *p, t, k* の2系列が對立する。また、聲調は高型 (*ŋ*) と上昇型 (*V*) の二つしか音素的に對立しない。

分離不可能名詞の在り方はゴリン語ボルミル方言によく似てをり、1人稱所有者とそれ以外(一般所有者)の二つの人稱・數が接尾辭により義務的に標示される。1人稱所有者の接尾辭は複數の異形態を持つが一般所有者の接尾辭は常に同じ形式で現はれる。

^{*6} 本来は語彙の意味だけでは所有者接尾辭がつきさうかどうか判断できないのだが、構文上の特徴を考慮に入れての検討は別の機会をまつしかない。

^{*7} 本稿で用ゐるゴリン語北ユリ方言の資料はモロ・シュル (Moro Sul) 出身でユリ族 (Yuri) アウライ・カン (Aurai Kan) 氏族のケトリン・デルパさんに教へていただいたものである。

- (44) a. 1人稱: -nan, -an, -e
 b. 一般所有者: -n

1人稱所有者の形式のうち、複数の所屬語彙が存在するのは三つである。次に語形變化の例を一つずつ示す。

- (45) a. $\forall o$ -nan / $\forall o$ -n 「手」 -nan/-n (-nan 型)
 手-1.POSS 手-POSS
 b. $\forall gipl$ -an / $\forall gipl$ -n 「頭」 -an/-n (-an 型)
 頭-1.POSS 頭-1.POSS
 c. $\forall mom$ -e / $\forall mom$ -n 「母方のをぢ」 -e/-n (-e 型)
 舅父-1.POSS 舅父-POSS

上の屈折類は所屬語彙の多い順に提示してある。-e 型以外は語幹末音の特徴に条件づけられた異形態だと考へてよい。次に、これまでに収集された各屈折類に所屬する語彙を挙げる。

- (46) a. -nan 型: $\forall o$ - 「手、腰」、 $\forall kau$ - 「足」、 $\forall gai$ - 「體、皮」、 $\forall guma$ - 「鼻」、 $\forall gra$ - 「口」、 $\forall kna$ - 「耳」、 $\forall tawa$ - 「肩」、 $\forall da$ - 「腹」、 $\forall mu$ - 「背」、 $\forall de$ - 「尻、腸」、 $\forall mr$ - 「肝臟、肺」、 $\forall sik$ - 「齒」、 $\forall no$ - 「首、喉」、 $\forall ap$ - 「年上兄弟姉妹」、 $\forall kep$ - 「年下兄弟姉妹」、 $\forall wa$ - 「息子」、 $\forall i\forall mau$ - 「妻の父」、 $\forall wau$ - 「妻の母」、 $\forall kop$ - 「姉妹の子供」、 $\forall ka$ - 「名」、 $\forall wi$ - 「夫」、 $\forall ep$ - 「妻」、 $\forall bo$ - 「脛」、 $\forall mo$ - 「男性器」、 $\forall grap$ - 「舌」
 b. -an 型: $\forall gipl$ - 「頭」、 $\forall om$ - 「目」、 $\forall map$ - 「額」、 $\forall pel$ - 「胸」、 $\forall al$ - 「兄、弟」、 $\forall awal$ - 「姉、妹」、 $\forall apl$ - 「娘」、 $\forall kel$ - 「同性同世代姻戚(男)」、 $\forall mn$ - 「同性同世代姻戚(女)」、 $\forall bn$ - 「腿」、 $\forall grap$ - 「脛」、 $\forall kopl$ - 「臍」、 $\forall daal$ - 「脇腹」
 c. -e 型: $\forall mom$ - 「母方のをぢ」、 $\forall yau$ - 「祖父」、 $\forall ai$ - 「祖母」、 $\forall duu$ - 「同名の人」

次に不規則なものを示す。

- (47) a. 「ape ~ $\forall ape$ / $\forall ne$ -n
 父.1.POSS 父-POSS
 b. 「mna / $\forall ma$ -n
 母.1.POSS 母-POSS

不変化だが所有者人稱接尾辭と關連すると思はれる末音-nを持つ語彙がいくつか見付かつてゐる。

- (48) \vee mr-n 「～に對する愛情」、 \vee pauna-n 「顎、頬」、 \vee yopla-n 「骨」、 \vee ipa-n 「陰、靈」、 \vee kowa-n 「祖父母、先祖」、 \vee yaal-n 「尾」、 \vee bin-n 「底」、 \vee kul-n 「脂」、 \vee mi-n 「肉」、 \vee kula-n 「柄」、 \vee ri \vee ekn-n 「(木の)敷居」、 \vee duul-n 「削りかす」、 \vee nopla-n 「粗朶、枯れた小枝」、 \vee kui-n 「翼、鞆の手」、 \vee krn-n 「垢、雲脂」、 \vee giil-n 「乾いた」、 \vee nl-n 「液」、 \vee gol-n 「古い」

4.3 ゴリン語オムコライ・キア方言

ゴリン語オムコライ・キア (Omkolai Kia) 方言はオムコライに居住するキア族の話すゴリン語である*8。これまでと同様の手順で調査結果をまとめる。

まづ所有者人稱接尾辭の異形態を示す。

- (49) a. 1人稱: -nan, -an, \emptyset , -e, -anan
b. 一般所有者: -n

次に主要な屈折の型を示す。

- (50) a. \vee o-nan / \vee o-n 「手」 -nan / -n (-nan 型)
手-1.POSS 手-POSS
b. \vee din-an / \vee din-n 「胸」 -an / -n (-an 型)
胸-1.POSS 胸-POSS
c. \vee yau- \emptyset / \vee yau-n 「祖父」 \emptyset / -n (\emptyset 型)
祖父-1.POSS 祖父-POSS
d. \vee mom-e / \vee mom-n 「頭」 -e / -n (-e 型)
舅父-1.POSS 舅父-POSS
e. \vee br-anan / \vee br-n 「頭」 -anan / -n (-anan 型)
頭-1.POSS 頭-POSS

上記の屈折型に所屬する語彙は次の通りである。

- (51) a. -nan 型: \vee o- 「手」、 \vee kau- 「足」、 \vee gai- 「體、皮」、 \vee guma- 「鼻」、 \vee gra- 「口」、 \vee kra-

*8 本稿で用ゐるゴリン語オムコライ・キア方言の資料はグイニメ (Gwinime) 出身でキア族 (Kia) ダイ・ガウン (Dai Gaun) 氏族のシネさんに教へていただいたものである。

「耳」、/map-「額」、\pau-「顎、頬」、\kipa-「肩」、/mu-「背」、\de-「尻」、/yoplaa-「骨」、/sik-「齒」、\no-「首、喉」、\kuya-「靈、陰」、/ap-「年上兄弟姉妹」、/kep-「年下兄弟姉妹」、/wa-「息子」、\ap-「娘」、/kop-「姉妹の子供」、/gau-「孫」、/ka-「名」、/am-「乳房、乳」、/mo-「男性器」

- b. -an 型: /din-「胸」、/dan-「腹」、\oin-「腰」、/al-「兄、弟」、/apaul-「姉、妹」、/ker-「同性同世代姻戚(男)」、/mn-「同性同世代姻戚(女)」、/bon-「脛」
- c. ∅ 型: \yau-「祖父」、/ai-「祖母」、/duu-「同名の人」
- d. -e 型: /mom-「母方のをぢ」
- e. -anan 型: \br-「頭」、/br-「腿」

ボルミル方言や北ユリ方言と同じく語幹末に歯莖共鳴音をもつ-an 型とそれ以外の-nan 型が規則型であり、その他が語彙的に指定された變格である。-e 型は今のところ一例しかないが、他のゴリン語方言と同様に示した。

以上の型に加えて次の不規則名詞が見付かった。

- (52) a. /mr-anan / /mri-n 「肝臓、肺」 (-anan 型 i 語幹)
肝肺-1.POSS 肝肺-POSS
- b. /ape / /ne-n 「父」 (1 人稱不規則)
父-1.POSS 父-POSS
- c. /mna / /ma-n 「母」 (1 人稱不規則)
母-1.POSS 母-POSS

不變化だが、語末に所有者人稱接尾辭に由來する可能性のある n を持つものを次に示す。

- (53) a. /ml-n「指、實」、\nula-n「爪」、\kan-n「腸」、/ik-n「毛」、/mii-n「肉」、/kul-n「脂」、\daal-n「臭い匂ひ」、/gul-n「柱」、/ip-n「種苗」、/mori-n「掌」
- b. \bolai-n「上」、\daa-n「坂」、\bra-n「端」
- c. \dman-n「年寄りの」、\kun-n「同じ」、\plaa-n「平べつたい」
- d. /sr-n「質問」
- e. \yal-n ni「その男」

次の例は語末の n の有無による自由變異をもつ語彙である。

- (54) /mnan-n ~ /mnane「匂ひ」

4.4 ゴリン語ソルト・キア方言

ゴリン語ソルト・キア方言はソルト地域に居住するキア族の話すゴリン語である^{*9}。多くのゴリン語諸方言と同様に有聲性のみが対立する2系列の閉鎖音をもつ。語末にしか現はれないが鼻母音が音素的に認められるのが特徴である^{*10}。語頭の/k/が母音/a, e, o/の前で[h]で現はれる。

所有者人稱接尾辭は1、2、3人稱が區別されるのが他のゴリン語方言と異なる大きな特徴である。次にそれぞれの接尾辭の異形態を示す。

- (55) a. 1人稱: -na, -a, -o
b. 2人稱: -ni, -i
c. 3人稱: [+nas], -ĩ, -ũ, -e

上の3人稱標識 [+nas] は語幹末の母音が鼻音化するものであり、3人稱所有者形で最も多い。この型の語幹末母音として、對立する五つの母音全てが確認された。

- (56) a. kgra-na / kgra-ni / kgrã
□-1.POSS □-2.POSS □-3.POSS
「□」 -na / -ni / [+nas] (3人稱鼻音化型、語幹末音 a)
- b. vde-na / vde-ni / vdē
腸-1.POSS 腸-2.POSS 腸-3.POSS
「尻、腸」 -na / -ni / [+nas] (3人稱鼻音化型、語幹末音 e)
- c. kgai-na / kgai-ni / kgaĩ
體-1.POSS 體-2.POSS 體-3.POSS
「體、皮」 -na / -ni / [+nas] (3人稱鼻音化型、語幹末音 i)
- d. ho-na / ho-ni / hõ
手-1.POSS 手-2.POSS 手-3.POSS
「手」 -na / -ni / [+nas] (3人稱鼻音化型、語幹末音 o)

^{*9} 本稿で用ゐるゴリン語ソルト・キア方言の資料はワイドウ (Waidu) 出身でキア族 (Kia) シバ・カルベ (Sipa Kalbe) 氏族のママ・カマさんに教へていただいたものである。語中の p と b はミニマル・ペアが見付からず音素としてのステイタスに確信がもてないが、はつきりと違いが聞き取れ、また出現環境が特定できないので區別して表記することにする。

^{*10} 東シンブー諸語の中で鼻母音が報告されてゐるものにソルト・ユイ語がある (Irwin 1974)。Irwin (1974) の記述では語末の/ŋ/(表記は ng) と解釋されてゐる。ソルト地域の特徴かもしれない。

- e. /kau-na / /kau-ni / /kaũ
 足-1.POSS 足-2.POSS 足-3.POSS
 「足」 -na / -ni / [+nas] (3人稱鼻音化型、語幹末音 u)

3人稱で-ūが出るものと-īが出るものは、語幹末の子音が唇音であるかどうかで分布が分かれる。

- (57) a. /kno-na / /kno-ni / /knõ
 首-1.POSS 首-2.POSS 首-3.POSS
 「首」 -na / -ni / ī (3人稱-ī/ū型、-ī)
 b. /map-na / /map-ni / /map̃
 額-1.POSS 額-2.POSS 額-3.POSS
 「額」 -na / -ni / ū (3人稱-ī/ū型、-ū)

(57)の二つの型は、一つの上位屈折類「3人稱-ī/ū型」に属する、語幹末音に条件づけられた下位タイプと見ることができる。

3人稱-ī/ū型で語幹末に齒莖共鳴音 l, r, n を持つものは、次の語形變化をする。

- (58) a. /geb-na / /geb-ni / /gebl̃
 頭-1.POSS 頭-2.POSS 頭-3.POSS
 「頭」 -na / -ni / ī (3人稱-ī/ū型、l脱落)
 b. /m-na / /m-ni / /mr̃
 肝肺-1.POSS 肝肺-2.POSS 肝肺-3.POSS
 「肝臓、肺」 -na / -ni / ī (3人稱-ī/ū型、r脱落)
 c. /di-na / /di-ni / /diñ
 胸-1.POSS 胸-2.POSS 胸-3.POSS
 「胸」 -na / -ni / ī (3人稱-ī/ū型、n脱落)

上の例の通り、1人稱形と2人稱形で語幹末音が脱落すると考へる。共時的には語幹交替を認めることで接尾辭の異形態を最小限に抑へる分析である。他の言語・方言の語幹末の齒莖共鳴音と對應するので、接尾辭附加と語幹末音脱落は通時的に起こつた變化でもある。

同様に、語幹末の n が脱落するが、3人稱所有者接尾辭が-e で現はれるものがある。以下の例の通りである。

- (59) kpau-na / kpau-ni / kpau-n-e
 顎-1.POSS 顎-2.POSS 顎-3.POSS
 「顎、頬」 -na / -ni / -e (3人稱-e型、n脱落)

その他、次の型がある。

- (60) a. ᵐap-na=bia / ᵐap-ni=bia / ᵐap-m=bia
 同性年上兄弟姉妹-1.POSS=KIN 同性年上兄弟姉妹-2.POSS=KIN 性年上兄弟姉妹-3.POSS=KIN
 「同性年上兄弟姉妹」 -na / -ni / -m (3人稱-m型)
- b. ᵐmn-nā=bia / ᵐmn-ī=bia / ᵐmn-ĩ=bia
 姻戚(女)-1.POSS=KIN 姻戚(女)-2.POSS=KIN 姻戚(女)-3.POSS=KIN
 「同性同世代姻戚(女)」 -na / -ī / -ĩ (2人稱-ĩ型)
- (61) a. 3人稱鼻音化型: ᵐo -「手」、 ᵐkau -「足」、 ᵐgai -「體、皮」、 ᵐguma -「鼻」、 ᵐgra -「口」、 ᵐkra -「耳」、 ᵐkipa -「肩」、 ᵐmuu -「背」、 ᵐde -「尻、腸」、 ᵐyopla -「骨」、 ᵐyuwi -「尾」、 ᵐmo -「男性器」、 ᵐwa -「息子」、 ᵐai -「祖母」、 ᵐgau -「孫」、 ᵐka -「名」、 ᵐiba -「陰、靈」
- b. 3人稱-ĩ/-ũ型
 -ũ: ᵐmap -「額」、 ᵐkup -「腹」、 ᵐam -「乳房」、 ᵐkeb -「同性年下兄弟姉妹」、 ᵐkop -
 「姉妹の子供」、 ᵐap -「娘」
 -ĩ: ᵐsik -「齒」、 ᵐno -「首、喉」
 共鳴音脱落: ᵐgeb(l) -「頭」、 ᵐom(l) -「目」、 ᵐm(r) -「肝臓、肺」、 ᵐgrap(r) -「舌」、
 ᵐdi(n) -「胸」、 ᵐkokai(n) -「腰」、 ᵐbo(n) -「脛」
- c. 3人稱-e型、鼻音脱落 ᵐpau(n) -「顎、頬」、 ᵐb(n) -「腿」
- d. 3人稱-m型: ᵐwi=bia 「夫」、 ᵐep=bia 「妻」、 ᵐap=bia 「同性年上兄弟姉妹」
- e. 2人稱-ĩ型: ᵐmn=bia 「同性同世代姻戚(女)」、 ᵐkeul -「臍」

例外的な語形變化が比較的多い。以下に示す。

- (62) a. ᵐnabe / ᵐne-ni / ᵐnē
 父.1.POSS 父-2.POSS 父.3.POSS
 「父」 (1人稱で語幹交替)
- b. ᵐnamne / ᵐna-ni / ᵐmā
 母.1.POSS 母-2.POSS 母.3.POSS
 「母」 (1人稱で語幹交替)

- c. ʎal-an=bia / ʎal-en=bia / ʎal-ẽ=bia
 異性兄弟姉妹-1.POSS=KIN 異性兄弟姉妹-2.POSS=KIN 異性兄弟姉妹-3.POSS=KIN
 「異性兄弟姉妹」
- d. ʎkel-ã / ʎkel-ĩ / ʎkel-ĩ
 姻戚(男)-1.POSS 姻戚(男)-2.POSS 姻戚(男)-3.POSS
 「同性同世代姻戚(男)」
- e. ʎmom-o / ʎmom-ni / ʎmom-ũ
 舅父-1.POSS 舅父-2.POSS 舅父-3.POSS
 「母方のをぢ」
- f. ʎdu-wo / ʎdu-ni / ʎdũ
 同名者-1.POSS 同名者-2.POSS 同名者-3.POSS
 「同名の人」
- g. ʎyaw-e / ʎyau-ni / ʎyaũ
 祖父-1.POSS 祖父-2.POSS 祖父-3.POSS
 「祖父」

不変化だが所有者人稱接尾辭と關連すると思はれる語末の鼻母音を持つ語彙がいくつか見付かつてゐる。

- (63) ʎnrĩ 「液」、ʎmlĩ 「指、實」、ʎegĩ 「毛」、ʎmĩ 「肉」、ʎkuũ 「脂」、ʎobũ 「種苗」

4.5 ゴリン語の先行記述

ゴリン語は、筆者以外の研究者による記述研究が存在する。ここで、これまでのゴリン語記述とのデータ、分析の異同を示しておきたい。Bunn (1974: 49–53) では分離不可能名詞に對して次のやうに a 類、b 類の二つの屈折類をたてる *¹¹。

- (64) a. -an (1 人稱所有者), -in (2 人稱所有者), -∅ (3 人稱所有者)
 b. -an (1 人稱所有者), -in (2/3 人稱所有者)

*¹¹ Bunn (1974) の記述對象となつた方言は明らかではない。聲調については Bunn 資料を筆者が再分析した語聲調 (千田 2003, 2013) を示す。

Bunn (1974: 49–53) は、分離不可能名詞の記述において、実際には分離不可能名詞を大きく有生と無生の二つに分け、それぞれに二つの屈折類をたててゐる。しかし、意味的な有生性の違ひは屈折類の觀點からは關係せず、それぞれの a 類 b 類は同じ屈折をする。

接尾辭の異形態の組み合わせの型によつて屈折類を立てること自體は本稿の方針と同じであるが、人稱の對立に關する觀察と語幹・接尾辭の分析について異なるところがある。

まづ、音素分析の違いに由來する違いがある。筆者の資料で音聲的に成節子音で現れた子音の後の [n] に對して、Bunn は成節子音を認めずに ⟨in⟩ と表記する。これが資料自體の違いに基づくものか、分析の違いなのか、あるいは兩方なのか、判然としない*12。成節子音とは關係のない位置にも筆者の資料に確認できない/i/が示されてゐるデータもある。

次に、Bunn の分析によるそれぞれの類の具體例を見よう。

- (65) a. 「wan-an / 「wan-in / 「wan-∅ 「息子」 (a 類)
 息子-1.POSS 息子-2.POSS 息子-3.POSS
- b. √gibil-an / √gibil-in 「頭」 (b 類)
 頭-1.POSS 頭-2/3.POSS

Bunn の示す (65a) の「wan-an / 「wan-in / 「wan-∅ 等は「wa-nan / 「wa-nin / 「wa-n 等と語幹に n を含めずに接尾辭の一部と見るのがよい。Bunn が a 類の語幹として擧げるものは全て末音 n を持つてをり、この n が語幹の一部か接尾辭の一部か一見曖昧である。しかし、これが接尾辭であることは、第一に、分離可能名詞の振る舞ひに明らかである。

分離可能名詞である √bolima 「豚」や √gariba 「土地」は所有者人稱接尾辭の附加が義務的ではない。3 人稱所有者を接尾辭で表はす場合に、「彼の土地」は √gariban という形式になる。Bunn (1974) では n を語幹末音として追加して屈折させる、と分析する。この考へを筆者の理解により (66a) に示す。しかし、(66b) の解釋が可能であるならば、より自然ではないだろうか。

- (66) a. √gariba-n-∅(土地-[語幹形成]-3.POSS)
 b. √gariba-n(土地-3.POSS)

この語幹末音添加は、分離可能名詞が所有者人稱の屈折をとる際に必ず起こるものではない。Bunn (1974: 50) 自身が示すやうに、√ibal 「人々」に 3 人稱所有者の接尾辭がつくと、語幹交替を起こさず b 類屈折の √ibal-in 「彼の人々」といふ形が出る。この、√gariba-n の-n と √ibal-in の-in とは音韻條件による異形態と考へられる*13。

*12 成節子音の前に i を表記するのは、表記上の問題である可能性もある。シンブー州の多くの言語で、固有名の表記の際に成節子音の前の i を書く習慣がほぼ確立してゐる。

*13 そもそも本稿でのボルミル方言記述のやうに成節子音を認める場合には音素レベルでも同一の-n である。

そして、Bunn の分析によると「diin-など一部の b 類語彙が末音 n を持つため、少なくとも n 終はりの語幹については a 類なのか b 類なのか、語彙的に決まってみると考へなければならなくなる。Bunn の a 類屈折語幹に末音 n を認めなければ、彼の a 類と b 類は語幹末音の条件で決まる二つの規則型だといふことができる。

以上に基き、a 類と b 類のにつく接尾辭を次のやうに修正する (分節音表記は Bunn に従ふ)。

- (67) a. -nan (1 人稱所有者), -nin (2 人稱所有者), -n (3 人稱所有者) (-nan 型)
 b. -an (1 人稱所有者), -in (2/3 人稱所有者) (-an 型)

しかし、もう一つの問題が残る。上に見える通り、Bunn の観察によると、屈折類により人稱の體系が異なるといふことである。筆者の資料ではこのやうな綺麗な分布は確認できなかった。確かに -nm という形式が出るのは -nan 型の方だが、所有者人稱は 2 人稱でも 3 人稱でもありえ、また -n と置き換へが可能である。これが世代差なのか、地域差なのか、分からない。この点についてはもう一つの先行研究も参照してみたい。

Evans, Besold, Stoakes, and Lee (2005) はメルボルン大學で 2003 年度の第一セメスターに行はれた言語調査實習の成果として出した論文集である。所有者人稱接尾辭を扱った論文はないが、受講者全員が一緒に作ったといふ辭書のセクション (p189–213) には 32 項目について所有者人稱による變化語形が挙げられてゐる。扱った方言は、ユリ族のゴリン語だが、中ユリ方言、北ユリ方言などよりもゴリン・ミアン系の諸方言にむしろ近い^{*14}。

Evans et al. (2005) のデータは 1/2/3 人稱所有者形が挙げられてゐる。以下に語形變化の型をまとめる。まづ、Bunn の立てる二つの屈折類の語形變化パターンに合致するものが (68a, b) の合はせて 19 例あつた。

- (68) a. -nan/-nin/-n 型 (12 例): daan-「脇腹」、de-「尻」、eb-「妻」、gra-「口」、imau-「妻の父」、iwau-「妻の母」、kaa-「名」、kau-「足」、mu-「背」、no-「首」、wa-「息子」、yau-「祖父」^{*15}

^{*14} まづ第一に話者が自分の言語を「ゴリン語」だとしたところが特徴である。中ユリ方言、北ユリ方言などを話すユリ族の場合、自分の言語を「ユリ語」と稱する。この論文集のデータを見るといくつかの語彙・表現がゴリン・ミアン系方言の特徴を持つてゐる。例へば「やめろ」を意味する表現が bidera である。動詞 bider- は典型的にゴリン・ミアンの語彙であり、多くのユリが「やめろ」を kera といふことはシンプーではよく知られてゐる。またこの本には CD がついてをり、音聲資料を聞くことができるが、韻律特徴も他のユリとは異なる。

^{*15} yau-「祖父」の 3 人稱所有者形は yawe もある。

- b. -an/-in/-in 型 (7 例): al- 「異性兄弟姉妹」、ke- 「同性同世代姻戚(男)」、din- 「胸」、gibl- 「頭」、kil- 「臍」、konn- 「長子」、yol- 「母方いところ」*16

3 人稱所有者形に -nin が現はれる記録は (69a, b) の合はせて 6 例あつた。

- (69) a. -nan/-nin/-nin 型 (3 例): e- 「友達」、mi- 「肝臓」、oo- 「手」
 b. -nan/-nin/-nin~-n 型 (3 例): ab- 「同性年上兄弟姉妹」、keb- 「同性年下兄弟姉妹」、kob- 「姉妹の子供」

その他次の變則があるやうだ。

- (70) a. -e/-inin/-in 型 (2 例): mom- 「母方のをぢ」、mam- 「母方のをぢの妻」
 b. -n/-nin/-n 型 (3 例): kna- 「耳」、ne- 「父」、yobla- 「骨」
 c. その他 (3 例): ai/ai-n/ai-n 「祖母」、abl-an/abl-in/abl-an 「娘」、mna/man-in/man-in~man 「母」

Evans et al. (2005) のデータでは、1 人稱に -nan が出る場合は 2 人稱に一貫して -nin が使はれる点では Bunn の立てた屈折類に近い。しかし、やはり -nin が 3 人稱にも使はれたり、-n と自由變異の関係になつたりする点は筆者のデータと共通する。

5 グナア語

グナア語 (Gunaa)*17 の分離不可能名詞はゴリン語ボルミル方言によく似てをり、1 人稱所有者とそれ以外 (一般所有者あるいは非 1 人稱所有者) の二つの人稱・数が接尾辭により義務的に標示される。1 人稱所有者の接尾辭は複数の異形態を持つが一般所有者の接尾辭は常に同じ形式で現はれる。

- (71) a. 1 人稱: -nan, -an, -anan, -∅, -e
 b. 一般所有者: -n

1 人稱所有者の形式のうち、複数の所屬語彙が存在するのは四つであり、これらにより分離不可能名詞の屈折類を設定することができる。

*16 3 人稱に!!の形式も使へるとのこと。-an/-in/-in~-n!!

*17 グナギ (Gunagi)、グナンギ (Gunangi) とも。本稿で用ゐるグナア語の資料はイギディ (Igidi) 出身でグナア族 (Gunaa) マルム・ク氏族 (Marm Ku) のマトリナ・マイさんに教へていただいたものである。

- (72) a. /wa-nan / /wa-n 「息子」 -nan/-n (-nan 型)
 息子-1POSS 息子-POSS
- b. /ker-an / /ker-n 「同世代姻戚」 -an/-n (-an 型)
 同世代姻戚-1POSS 同世代姻戚-POSS
- c. /mr-anan / /mr-n 「肝臓、肺」 -anan/-n (-anan 型)
 肝肺-1POSS 肝肺-POSS
- d. /yau / /yau-n 「祖父」 -∅/-n (∅ 型)
 祖父-1POSS 祖父-POSS

上の屈折類は所屬語彙の多い順に提示してある。∅ 型以外は語幹末音の特徴に条件づけられた異形態だと考へてよい。次に、これまでに収集された各屈折類に所屬する語彙を挙げる。

- (73) a. -nan 型: /ok- 「手」、/kap- 「足」、/gai- 「體、皮」、/guma- 「鼻」、/gra- 「口」、/kra- 「耳」、/map- 「額」、/kwipa- 「肩」、/mu- 「背」、/de- 「尻、腸」、/sik- 「齒」、/nok- 「首、喉」、/kuya- 「陰」、/vap- 「年上兄弟姉妹」、/wa- 「息子」、/moi- 「母方のをぢ」、/kop- 「姉妹の子供」、/gau- 「孫」、/kak- 「名前」
- b. -an 型: /oml- 「目」、/paun- 「顎、頬」、/din- 「胸」、/dan- 「腹」、/okain- 「腰」、/al- 「兄、弟」、/aupaul- 「姉、妹」、/ker- 「同性同世代姻戚(男)」
- c. -anan 型: /br- 「頭」、/mr- 「肝臓、肺」、/mn- =/bi 「同性同世代姻戚(女)」*18
- d. ∅ 型: /yau- 「祖父」、/ai- 「祖母」、/di- 「同名の人」

各類の所屬語彙の形式を観察すると、∅ 型 (73d) は語彙的に指定されてゐると考へるしかないが、ほかの型は共時的には音韻的に条件づけられてゐる。∅ に所屬する語彙は語幹末音に高母音をもつといふ共通点があるが、語幹末音に高母音をもつものには /gau- 「孫」、/gai- 「體、皮」、/mu- 「背」など-nan 型 (73a) に屬するものもある。一方で-anan 型 (73c) の語幹は母音を含まず、語幹末音が齒莖共鳴音 r, n のものであり、確認された所屬語彙の数は少ないものの、これまでに例外がない。-an 型 (73b) の屈折をする語幹は、母音を含んでをり、かつ共鳴音に終はるものである。それ以外は全て-nan 型に屬する。(73a-c) は規則型であり (73d) の ∅ 型は變格だと言つてよからう。

以上の屈折類に屬さない例外も見付かつてゐる。1 人稱單數所有者を表はすのに接尾辭 -e を使ふもの (74a)、補充法を使ふもの (74b)、語幹交替と接尾辭 na を使ふもの (74c) が

*18 /mn-anan=/bi 「!!」 /mn-n=/bi 「!!」

ある。

- (74) a. /kep-e /kep-n 「年下兄弟姉妹」
年下兄弟姉妹-1POSS 年下兄弟姉妹-POSS
- b. /ape /ne-n 「父」
父.1POSS 父-POSS
- c. /m-na /ma-n 「母」
母-1POSS 母-POSS

不変化だが所有者人稱接尾辭と関連すると思はれる末音-nを持つ語彙がいくつか見付かつてゐる。部分・属性を表はす名詞 (75a)、形容詞・形容詞的動名詞 (75b)、場所名詞 (75c)、その他 (75d) がある。

- (75) a. /yopla-n 「骨」、/mi-n 「肉」、/kumn-n 「香り」、/ip-n 「種苗」
b. /dman-n 「年寄りの」、/kun-n 「同じ、類似の」、/dokn-n 「痒い」、/nmn-n 「強い」、
/plaa-n 「平べつたい」
c. /dak-n 「坂」、/bna-n 「端」、/bak-n 「途中」
d. /sr-n 「質問」、/bika-n 「羊齒」

6 通時的観点から見た分離不可能名詞と所有者人稱接尾辭

千田 (2011) では、東シンプー諸語の分離不可能名詞についてトーンの對應パターンが五種類あることを示し、他の語彙のトーン對應をも視野に含めつつそのパターンが祖語の五種類の語聲調に直接遡る可能性を示したところである。本稿で示した東シンプー諸語の分離不可能名詞の屈折類は分節音の音形に關する通時的な問題を提起する。

6.1 祖語の人稱體系に關する問題

ゴリン語やグナア語の所有者人稱の體系 (1/一般) は他の東シンプー諸語 (1/2/3/非單數) に比べ單純である。祖語に假定できる體系は複雑な方であらうか、それとも單純な方であらうか。

クマン語、ドム語、ニマイ・ディカ語などに見られる 1 人稱所有者、2 人稱所有者、非單數所有者を表はす -na, -n, -ne は東シンプー諸語の人稱代名詞 *「na 「私」、*Len 「お前、お前たち」、*「ne 「我々、自分」 に直接由來するであらう。また 2 人稱單數所有者を表はす -n は 2 人稱單數主語を表はす動詞の屈折接尾辭 -n と、3 人稱單數所有者の -m は 3 人稱單數主語

の-m と同一形式である。なほ、東シンプー諸語は、クマン語の「ye「彼、彼女、彼ら」を除くとほとんどの言語に 3 人稱代名詞が存在しない。これらの言語では-na / -n / -m / -ne (1/2/3/NSG) の四つの所有者人稱・数が對立してゐるが、上記の形式群の關係を見ると、あまり古いものだと考へる必要はないかもしれない。しかしどの言語も綺麗に残してゐるとも言へる。以上は代表的な異形態であり、その他の異形態については後述する。

ゴリン語では祖語に假定される語末の m 對 n の對立を失ひ、ソルト・キア以外の方言で n に合流してゐる。これが所有者人稱・数の體系を單純化させる直接のきっかけだと言へるのではないか。といふのも、一般所有者を意味する-n の起源は、-n / -m (2/3) の合流以外になささうだからである。また、ゴリン語諸方言でいくつか擧げてきた、不變化の n 終はりの語彙は、スワウエ語では m 終はりに對應する。ゴリン語諸方言に見られる 1 人稱所有者を表はす-nan がスワウエ祖語の-nam (1SG) と同源だとすればゴリン祖語においては少なくとも三つの所有者人稱を區別する*-nam / *-n / *-m (1/2/3) のやうな體系を持つてゐたと考へられる(千田 2011)。また、ソルト・キア方言の 1 人稱所有者接尾辭が-na であることや、ゴリン語やスワウエ語では*-m の用法が擴大して多くの語彙に附加されてゐることを見ると、1 人稱の*-nam は*-na(1.POSS) に*-m(POSS) がついた形式なのだらう。

東シンプー祖語の所有者人稱體系は、ゴリン語の現代諸方言に見られる二項對立のやうなものではなかつたはずである。

6.2 相互關係表現に関する問題

クマン語エンドウガ方言の 3 人稱-mo、2 人稱-nen 型に代表されるクマン語の wa 終はりの語幹はそのままで、あるいは末音を e に變へて呼稱として使ふことができる方言がある(本稿のクナナ・ク方言)。この wa 終はりの語幹は全てが相互に同じ呼稱を使ひ合ふ關係呼稱に由來する可能性がある。

まづ、awa「祖父母」についてみる。Pfantz, Pfantz, Rufinus, and Kai (2002) によると awa は“his or her grandfather or grandmother or grandchild”、調査地は不明だが一見非對稱的な親族關係にある祖父母と孫が同じ語彙で表はされる方言があることが分かる。エンドウガ方言やクナナ・ク方言に見られる gawa「孫」も明らかに複合形式 ga-awa(子供-祖孫)からなる。屬性名詞が awa を修飾する構成は \nyal \nawa-(男 祖)「祖父」、\ab \nawa-(女 祖)「祖母」といふ句にも現はれる。もとは awa が祖孫の相互關係を表はす唯一の形式として存在し、のちに複合形式によつて男女や世代の區別がされるやうになつたと思はれる。

bawa についても、Pfantz et al. (2002) によると bawo “nephew, uncle” とあり、母方ををちと甥姪が同じ語彙で表はされる方言があるやうだ。母方ををちと甥姪の關係について

り、これらの関係は現在の東シンプー諸語話者にとつても相互性を帯びた、どちらの EGO から同じ呼稱を使ふべき関係だと感じられるものなのである。

そのほかにも相互関係を表はす語彙がある。例へば、**ndi*-「同名の人」、**/ker*-「同性同世代姻戚(男)」、**nimak*-「妻の父、婿」、**mn*-「同性同世代姻戚(女)」、**kia*-「夫の別の妻」である。このうち最初の二つの 1 人稱所有者形はほとんどの東シンプー諸語で **ndi*-e、**/ker*-a に由来する 1 人稱所有者形をもつ。**nimak*-e の反映形はゴリン語ボルミル方言に存在する。ゴリン語諸方言ではボルミル方言の *lduu*-「同名の人」、*lai*-「祖母」のやうに 1 人稱所有者接尾辭が \emptyset であるものも多い。相互関係を表はす語彙の 1 人稱所有者接尾辭は、* \emptyset 、**-e*、**-a* に由来する接尾辭をもつ割合が高いと言へる。すると逆に、これらの 1 人稱所有者接尾辭は呼稱形成接尾辭を起源とするのではないだろうか。ドム語では人名は單獨で呼び掛けに使へるが、呼び掛けの接語=*ne*、=*na* も存在する。これらがちやうど 1 人稱所有者接尾辭の異形態と関係するのではないか。

「同名の人」を表はす形式がニマイ・ディカ語で *vdii*-、ゴリン語で *duu*-、クマン語クナナ・ク方言で不規則な交替語幹 *di*- \sim *diu*-と若干不規則な對應を示すのはこの語幹が *wa* 終はりの相互呼稱を持つてみた痕跡かもしれない。

クマン語エンドウガ方言に現はれる 2 人稱の *-nen* はゴリン語に現はれる一般所有者の自由變異 *-nm* に関係があるかもしれない。例へば Evans et al. (2005) のデータで *mom*-「母方のをち」、*mam*-「母方のをちの妻」の 2 人稱形のみが *-inin* で終はるのは相互関係の 2 人稱所有者を残してゐる可能性がある。

6.3 流音の實現に関する問題

東シンプー諸語の分離不可能名詞に關する形態音韻法は齒莖共鳴音に *n* が後續することに伴ふ現象が多い。東シンプー諸語の固有語においては */l*、*/s* の分布がほぼ語頭に限られ、*/s* は高母音か子音が後續する環境で、*/l* はそれ以外で出るのがほとんどである。語頭以外で */l* が出る体系的な例外はクマン語の主要な方言群(本稿で扱つたものではエンドウガ方言)などで、*/n* の前に [r] が起こるもののみである。また、一方で流音 */l* (クマン語のみ)、*/r*、*/l* は語頭には起こらない。このうちいくつかの東シンプー諸語の形態音韻法において交替するのは */t*、*s*、*r* である *²¹。本稿ではクマン語エンドウガ方言、ニマイ・ディカ語ディカ方言で流音 */r* が */l* になる閉鎖音化を見た。Lynch (1983) はクマン語の [t] と [r] が同一音素の異音である可能性を指摘したが、これに [s] を加へる必要がある。ただし、現代の東シンプー諸語においては最小對が生じてゐる言語が多く、今後はトク・ピシンや英語

*²¹ このうち *t*、*s* の交替は本稿では扱はなかつたが、ドム語 *siula* */taula* 「蟲の名」など重複形式に見られる。

からの借用語を受け入れながら対立例を増やしてゆくものと思はれる。それほど遠くない昔に、/t, s, r/がどれも同一音素の異音の關係にあつたといふのが適切な言ひ方だと考へる。以上を踏まへ、クマン語エンドウガ方言の流音閉鎖音化規則を再考したい。先に挙げたのは次の規則であつた。

(77) $r, L \rightarrow t / ___ n$ (クマン語エンドウガ方言の流音閉鎖音化規則、(6)の再掲)

以上は次の二つの、この順番に適用される別の規則からなると考へる。

(78) a. $L \rightarrow r / ___ n$ (クマン語エンドウガ方言の側面音 r 化規則)

b. $r \rightarrow t / ___ n$ (クマン語エンドウガ方言の r 閉鎖音化規則)

一方でクマン語クナナ・ク方言では上の規則を両方もつてゐないが、本論で論じた通り、軟口蓋側面音が n の前で脱落する。

(79) $L \rightarrow \emptyset / ___ n$

以上の規則の設定が正しいとすればクマン語の語幹末の流音が L/r で交替するものは、基底で L をもつてみると考へるのがよいのではないか。さう考へればエンドウガ方言では上の規則だけで語幹末の L, r, t の交替を説明できる。クナナ・ク方言では別途規則が必要になる。

(80) $L \rightarrow r / ___ [L/R \text{ STEM}] - [n]$ (クマン語クナナ・ク方言の側面音 r 化規則)

また、エンドウガ方言で例を挙げると $\backslash \text{agr-a}$ (兄弟-1.POSS) $\backslash \text{agr-o}$ (兄弟-NSG.POSS) のやうに接尾辭-na, -ne の n が削除されるのも別途規則が必要である。

(81) $n \rightarrow \emptyset / \text{Cr.}[\text{POSS. SUFFIX}] ___$ (クマン語の所有者人稱接尾辭の n 削除規則)

$\backslash \text{agl-}$ 「兄、弟」、 $\backslash \text{yobl-}$ 「骨」のやうに、流音交替する語幹の末尾の流音の直前にはほとんどの場合閉鎖音がある。すると、そこに設定されるべき形態音韻規則は、少なくともある段階では語幹末子音連続に關する形で述べられるものだつたかもしれない。この假説にとつて問題になるのは子音連続を語幹末にもたない* abaul- 「姉、妹」がクマン語で流音交替すること、そして側面音終はりの子音連続を語幹末にもつ* ogoml- 「目」の反映形がどの言語でも流音交替しないことである*²²。この二つの語彙はどちらも比較的新しい複合形式であることなどとこれらの問題が關係するのではないかと考へる。

*²² その他、クマン語エンドウガ方言で $\backslash \text{daql-}$ 「脇腹」も語幹末に子音連続をもつ。

まづ、*abaul-「姉、妹」は流音交替語幹の屈折類が成立する以前に存在しなかつた新しめの形式である可能性がある。東シンプー諸語の兄弟姉妹名稱の體系は、言語、方言によっていくつかのバリエーションがある。祖形で示すと以下の三通りが確認されてゐる。

- (82) a. */agl-「兄弟」/*/abaul-「姉妹」
b. *「ab-「年上兄弟姉妹」/*「keb「年下兄弟姉妹」
c. */agl-「異性兄弟姉妹」/ *「ab-「同性年上兄弟姉妹」/ *「keb「同性年下兄弟姉妹」

クマン語は(82a)のみをもつ。ドム語やゴリン語オムコライ・キア方言では(82a, b)の二つが共存してゐる。ただし、ドム語第一方言では(82a)が優勢、ドム語第二方言では(82b)が優勢である。ゴリン語方言の多くが(82c)の體系を持つてゐる。クマン語以外では年上・年下を區別する語彙をほとんどの場合もつてゐることから祖語が(82a)のみからなる體系をもつてゐたとは考へにくい。一方で、(82c)の體系に現はれる三形式は、クマン語以外は全ての東シンプー諸語が保存してゐるやうなのである。

abaul-「姉妹」は「abを前部要素とする新しめの複合形式である可能性がある。冒頭に述べた通り、東シンプー諸語の形態法は単純で、ほんの少しの複合の痕跡が認められるだけだが、前部要素が*「ab「女」だと考へられる化石的複合形式がいくつか東シンプー諸語に存在する。「娘(親族)」を表はす*「abl-や、クマン語の「若い娘」を表はす「abai、ドム語の「女」を表はす「apalである。

以上のことから、*abaul-「姉妹」は祖語の最終段階で加はつた新しい複合形式である可能性があるが、そのことはニマイ・ディカ語ディカ方言で流音交替語幹でないことにも反映してゐる。一方で、クマン語では他の親族名稱の振る舞ひに合はせて*abaul-も流音交替語幹に組み込まれる過程が起こつたことになる。

ところで、ニマイ・ディカ語ディカ方言で交替する流音を語幹末にもつ屈折型に屬するものは、今のところ見付かつてゐる所屬語彙は少ない。ニマイ・ディカ語ディカ方言の流音交替する屈折類(1人稱-a型)も、對應するドム語の屈折類(1人稱-a型)も、所屬語彙は親族名稱ばかりである。すると、この屈折類は本來、語幹末に側面音を最終要素とする子音連続をもつ限られた親族名稱の語形變化をモデルとして、クマン語で大きく擴張、一般化されたものだと言へるのではないか。

次に「目」を表はす形式について考へてみよう。東シンプー祖語の*「ml-e「實、卵、指」にあたる形式の多義的な様子を東西シンプーにわたつて、また周辺の他の言語をも含めて論じた Osmond (2001) は見逃してゐるやうだが、東シンプー祖語の*「ogo+「ml-e「目」は複合形式で、前部要素は不明だが後部要素は*「ml-eを含んでゐる。繰り返しになるが、東

シンブー諸語の形態法は単純で、複合形式はほんの少しの複合の痕跡が認められるだけである。しかし後部要素に*/ml-eを含む語彙は他に*/gu+ml-e「乳首などの突起物」がある。また、スワウエ語では祖語の*/ml-eは*dwa-m「實、卵、指」に置き換はつてゐるが、「目」も後部要素のみ取り替へて「on /dwa-m(ドゥオム・コブ方言)などの形式で現はれる。この複合形式の後部要素はもとは變化語形をもつてゐなかつた可能性が高い。例へば、東シンブー祖語の手指、足指を表はす形式はそれぞれ*Log-o /ml-e(手指)、*「kal-e /ml-e(足指)で、前部要素が所有者人稱屈折をする一方、後部要素はその部分を表はす名稱なので人稱屈折しない、あるいは常に3人稱所有者形をとつてゐたと考へられる。その様相はそのまま現代諸言語に傳へられてゐる。これらのことが「目」を表はす形式の起源の傍證となる。おそらくは前部要素が本來の「目」を表はす形式で、それに*/ml-e「實、卵、指」を表はす形式(無變化、あるいは常に3人稱所有者形)が後續した「目玉」を表はす複合形式が祖語の段階で「目」の意味に變化した。それは、*「ogo「目」と「手」を表はす*Log-oとの違ひを強める目的であつたかもしれない。本來人稱屈折しなかつた後部要素が分離不可能名詞の體系に組み込まれた時にはクマン語の流音交替語幹の語幹變化規則は共時規則としてははたらかないやうになつてしまつてゐたのではないだらうか。

6.4 3人稱の-mに関する問題

全ての東シンブー諸語において3人稱に-mが使はれる語幹は一音節でコーダを持たないCV語幹である。例へばクマン語クナナ・ク方言では3人稱-m型の所屬語彙は全てCV語幹である。また、ニマイ・ディカ語の「ga-「體、皮」、「ki-「齒」、「ka-「名」は今回取り上げた言語・方言では他に見られない形式だが、やはり3人稱形が接尾辭-mを取る。これはCV語幹のみからなる少數の閉ぢたセットのみが3人稱接尾辭-mをもつてをり、クマン語以外の言語でその勢力を擴大したことを示してゐるやうに思はれる。

東シンブー諸語の分離不可能名詞の語形變化を辿つてゆくと、音形に關して全ての言語に共通して言へることがある。開音節の1モーラ1音節語が存在しないといふことである。3人稱の-mは分離不可能名詞の最小の大きさを保つことに貢獻してゐるとも言へる。

6.5 i語幹に関する問題

クマン語エンドウガ方言の3人稱-e/-o型i/u語幹とクマン語クナナ・ク方言の3人稱i型について、それぞれ屈折類を紹介する段で、共時的な分析の仕方について議論した。エンドウガ方言では語幹の一部(多くの環境で脱落する)、クナナ・ク方言では接尾辭と考へられるi/uは通時的にどのやうな經過を辿つてきたと考へられるだらうか。クマン語以外

の東シンプー諸語の対応語形を見ると、i/u(性格には i) が語幹の一部であつたことが示唆される。

まづ、クマン語エンドウガ方言のみに存在する u 語幹、それも 1 例しかない $\text{lmud}(u)$ -(エンドウガ方言) は i 語幹であつたと思はれる。例へばドム語やニマイ・ディカ語で 3 人称 i 型の屈折をする。またクマン語以外では語幹の二つの子音の間に母音 u が存在しない。だとすると自然な音変化の方向は、 $i > u$ である。クマン語は子音連続の間に多く母音を挿入する。語幹 *lmdi -の子音連続に u が挿入され、語幹末の i がそれに同化したと言ふことができる。逆に、他の語幹で $u > i$ が起こつたとすると自然な音変化では説明できないことがたくさん起こつたことになる。

問題の i が末音になる規則的な母音語幹をいくつか発達させた言語・方言があることも、祖語において i が語幹末音であつた證據にならう。ゴリン語ボルミル方言の vgai -「體、皮」、 lmri -「肝臓、肺」はその例である。

i 語幹には派生に由来するものもあるやうである。クマン語の $\text{lmag}(i)$ -「體、皮」、 $\text{lsig}(i)$ -「齒」、 $\text{nkag}(i)$ -「名」(以上エンドウガ方言)の語末の形式 gi はなんらかの接尾形式だと考へられる。これらの前部要素はそれぞれニマイ・ディカ語の「ga-「體、皮」、「ki-「齒」、「ka-「名」と同源だと考へる。少し込み入つた對應なので一つづつ見てゆきたい

まづ、 $\text{nkag}(i)$ -「名」は *kka 「言葉」に -gi がついたものではないか。-gi 附加が起こらなかつたニマイ・ディカ語では語幹 kka -は「言葉」の意味では所有者人稱接尾辭がつかず、「名」の意味では所有者人稱接尾辭が義務的につく、といふ多義的な語幹である。-gi 附加の起こつたクマン語その他の言語では前部要素の高型をそのまま反映するものがない。聲調の變化は -gi 附加に伴つて起こつたものではないか。その他の -gi 附加が疑はれる語も -gi なしのニマイ・ディカ語の語幹は高型、對應する -gi 終はりの語は屈曲聲調をもつ。

エンドウガ方言やクナナ・ク方言の $\text{lmag}(i)$ -「體、皮」は他の方言では $\text{gag}(i)$ -(Bergmann 1966) で現はれる。東シンプー諸語では東西シンプー祖語の語頭の g/ŋ が合流してしまつてゐるが、西シンプー諸語の中ワギの nganj 'skin, flesh' (Ramsey 1975) などとの對應から語頭の g は ŋ に遡る。すると、次の變化が起こつたと言へる。

- (83) a. $\text{*ŋa} + \text{gi}$ 「體、皮」 > *ŋa-gi (接尾辭附加による聲調變化)
b. > lmagi (エンドウガ方言やクナナ・ク方言で異化)
c. > ngagi (他の方言は規則的に語頭で $\text{*ŋ} / \text{*g}$ が合流)

上の異化が起こるとすると、同様に「齒」にも異化が起こつたと考へてをかしくない。

- (84) $\text{*ki} + \text{gi}$ 「齒」 > *ki-gi (接尾辭附加による聲調變化) > *ti-gi (異化) > *sigi (高母

音の前で摩擦音化)

上に述べたやうに t と s は遠くない過去に異音の関係であつたと考へる。ただし、聲調を見るとゴリン語諸方言とグナア語では**\sigi* をそのまま反映する形式が出るが、クマン語やドム語では**\sigi* でないと辻褄が合はない。ひよつとすると下降型の聲調が上昇型に變化したゴリン語ゴリン・ミアン系方言や北ユリ方言などから gi 附加された形式がクマン語やドム語に借用されたのかもしれない。ドム語は第一方言が *\sik-i*、第二方言が *\ki-m* で、gi 附加の過程を方言間で共有してゐないこともその傍證となる。

7 をはりに

本稿で示したデータはそれぞれの言語・方言につきお一人ずつの協力者を得て聞き出したものであり、今後の調査が進めば修正が必要になる部分も多いかと思ふ。しかし、この地域で現在調査に携はる研究者が他にゐない状況であれば、それぞれの共時態のあらましなりとも提示し、またこれらの言語・方言の関係を考察することに一定の意義があるかと考へここに資料と見解を整理した。

略號

1	1 人稱
2	2 人稱
3	3 人稱
KIN	親族
NSG	非單數
POSS	所有
SG	單數

参考文献

- Bergmann, Wilhelm (1953) *Grammatik der Kuman-Sprache gesprochen in der Gegend des Chimbu Flusses, East Central Highlands, New Guinea*. typescript.
- Bergmann, Wilhelm (1966) *Woerterverzeichnis der Kuman Sprache gesprochen in Inland von Neuguinea im Chimbu District*. typescript.
- Bunn, Gordon (1974) *Golin Grammar*, Vol. 5 of *Workpapers in Papua New Guinea Languages*.

- Summer Institute of Linguistics.
- Evans, Nicholas, Jutta Besold, Hywel Stoakes, and Alan Lee (Eds.) (2005) *Materials on Golin*.
The Dept. Linguistics and Applied Linguistics, The University of Melbourne.
- Hannemann, H.R. (1969?) *A Short Kuman Grammar And a Kuman-English Dictionary with an Appendix*. typescript.
- Irwin, B. (1974) *Salt-Yui Grammar*. Pacific Linguistic B-35. ANU.
- Lynch, J. (1983) “On the Kuman ‘liquids’”. *Languages and Linguistics in Melanesia*, 14, 98–112.
- Nilles, J. (1969) *Kuman English Dictionary*. mimeo.
- Osmond, Meredith (2001) “The Semantics of *Mong* in the Chimbu-Wahgi Languages of the Central Highlands, Papua New Guinea”. In Pawley, Andrew, Malcolm Ross, and Darrell Tryon (Eds.), *The Boy from Bundaberg: Studies in Melanesian Linguistics in Honour of Tom Dutton*, Pacific Linguistics 514, 251–259. Canberra: Australian National University, Research School of Pacific and Asian Studies.
- Pfantz, Daryl, Mary Pfantz, Komba Rufinus, and Phillip Kai (2002) *Kuman dictionary (Preliminary edition)*. Summer Institute of Linguistics.
- Ramsey, Evelyn M. (1975) *Middle Wahgi Dictionary*. Summer Institute of Linguistics.
- Tida, Syuntarô (2006) *A Grammar of the Dom Language*. Ph. D. thesis, Kyoto University.
- 千田俊太郎 (2002) 「ドム語の所有を表はす表現」. 『京都大学言語学研究』, 21, 337–367.
- 千田俊太郎 (2003) 「シンブー諸語と語トーン — ゴリン語とスワウエ語の再解釈」. *PAIK (Phonogy Association In Kansai)*, 神戸, 2003-04-26.
- 千田俊太郎 (2011) 「東シンブー諸語サブグループピングに向けて」. 大西正幸・稲垣和也 (編), 『地球研言語記述論集』, 3 巻, 153–182. 言語記述研究会・総合地球環境学研究所インダスプロジェクト.
- 千田俊太郎 (2013) 「ニューギニアの聲調類型の諸問題: シンブー諸語と語聲調を中心に」. 『語声調の音声的実現における異音的変異としての声調変位』. 日本音声学会第 327 回研究例会シンポジウム 2013-06-22.

(ちだしゅんたらう、京都大学大学院文学研究科)